6-1-5 汲沢地域ケアプラザ　地域活動交流コーディネーター

◇事業の強み

小学校と地区との協働事業については，定例事業ではないものの，当時の取り組みは地域は勿論，学校内においても語り継がれています。学校単独では成し得なかったことが，地域と一緒になって取り組んだことで影響力を持ち，その後の学校と地域とのソーシャルキャピタルに大きな影響を及ぼしたことは確かです。

また，その後様々な活動がこの地区で立ち上がる中で，「ちょこっとボランティア」も含めて，行政や社協などの専門機関が，地域課題を解決する為にシステムや事業を提案していくのではなく，地域住民自らが地域の課題を実感し，解決する為の活動を立ち上げたことが非常に強みであり本来の姿であると思います。その住民が考える活動をCOは一緒に支えていく役割を担っています。

◆ソーシャルキャピタルの視点

◇ソーシャルキャピタルを活かしたポイント

主催や実施形態，経緯は異なるものの，COが関わることで事業展開が広がったということがいえます。それはCOがソーシャルキャピタルを活かして事業展開を試みたことは確かですが，元々地域住民が持つソーシャルキャピタルをCOが意識し事業展開することも大切です。 例えば事例については別個の事業です。しかし，同じ地区内で事業展開したことにより，地域の中でソーシャルキャピタルが既に構築されているが故に，住民やキーパーソンは影響を受けて広がっていきます。広がり方は単に住民同士の話で終わるかもしれませんし，新たな事業展開に繋がるかもしれません。

大事なのは，住民が繋がりの中で「気付き」から何らかの行動に移していく過程の中で，住民が持つソーシャルキャピタルを意識しながらコミュニティエンパワメントに変化させていける人間がいるかどうか，その役割をCOが担うことが出来るのではないかと考えています。

◇健康福祉の成果

事例のような取り組みにより，関わる住民が役割を担い「力」を発揮していきます。それは小学校と地区との協働事業においても，「高齢者交流会」や「まちの話を聞く会」等では，参加された高齢者は勿論，自治会町内会長が子どもに地域の歴史を「伝える」役割を担っていました。

「ちょこっとボランティア」でも利用者が支えられるのは勿論，担い手が役割を担いながら「力」を発揮されていることが健康福祉に繋がっていると思います。

また，その後ケアプラザのもう一つの機能でもある「地域包括支援センター」による介護予防事業（横浜市元気づくりステーション事業）の展開にも活かされています。

◇課題と解決方法

今回，前記したような事例を通してCOと地区との関係性はより親密なものになりました。ケアプラザから一番離れていた地区にも関わらず関係性が強いものになり，ある意味大いにCOを活用しているともいえます。ケアプラザは中学校区に1館設置されており，身近な地域拠点として運営されています。しかし，例えば実際の地形やバス路線等のインフラの状況等から住民の生活圏は大きく異なります。

COが地域に入り込む為には，そういった生活圏の把握を始め地域アセスメントの必要性は勿論，ケアプラザという地域拠点で受け身の姿勢で待つのではなく，COはその各地域の状況に応じた行動やコミュニケーションを意識しながら積極的にアウトリーチしていく必要があります。そしてその地域の色に染まっていくことが求められるのだと思います。

横浜市独自の地域交流コーディネーターは役割が不明確である一方で，行政ではなく，介護保険制度等で配置された職種でもないからこそ，住民が持つ力を引き出し，住民自らの主体性を能動的に待ちながら「まちづくり」に取り組んでいけるのだと考えます。

◇事例から学べるポイント

この事例の特徴は， COが地域課題を解決する事業を住民に提案するのではなく，地域住民自らが課題を実感しその解決のために動き出すことを大事にしていることです。しかし，COは何もしないのではなく，常に地域の一員として地域に出むき，COの視点で各生活圏域の地域アセスメントに基づき地域の課題やニーズを理解していることが重要です。そして，住民自らがその課題に気づき動き出す機運を見逃すことなく掴み，活動を促すことがCOには求められます。また，住民活動を支援するにあたっては，COは常に地域のソーシャルキャピタルを意識した事業展開と支援をおこなうことも必要です。これらは，コーディネーターという職務の範疇が不明確であり，地域住民から受け入れられずらいといった課題を乗り越える上でも，また住民主体の効果的な地域保健事業を展開する上でも，COに求められるスキルといえるでしょう。

6-1-6 りぷりんと

◆概要

◇活動の目的

シニア読み聞かせボランティア“りぷりんと”は，米国のJohns Hopkins大学における高齢者による学校支援ボランティアExperience COrps®をモデルにし，東京都健康長寿医療センター研究所(東京都老人総合研究所)が世代間交流の効果を検証すべく開始した**「高齢者による子どもへの絵本の読み聞かせ活動を主としたボランティア活動」**を行うプロジェクトです。“りぷりんと”の基本コンセプトは高齢者による世代間交流を通した「社会貢献」「生涯学習」「グループ活動」です。高齢者がボランティア活動を通して①社会的役割と知的能動性を賦活し，②認知機能にとどまらず心身の健康を維持すること，そして，絵本の読み聞かせを通して，③子どもの図書・文学への関心を高めるとともに，④高齢者への親近感や敬老の念を深めることで，子どもの情操教育の一助となること，さらには⑤地域における世代間の信頼を維持・促進することが本プロジェクトの狙いです。

◇運営方法

2004年より3年間の研究プロジェクトとして東京都中央区，神奈川県川崎市多摩区，滋賀県長浜市の3地域で開始されました。“りぷりんと”ボランティアに参加するシニアは，3つの地域で60歳以上を条件に一般公募によって集められました。参加者は週1回2時間程度のボランティア養成セミナーを3ヶ月間受講し，絵本の選び方，読み聞かせの実習，子どもの現状の理解，ボランティア論などを学んだ後に学校や幼稚園など担当施設ごとに数人のグループに分かれて定期的な訪問・交流活動(主な内容は絵本の読み聞かせ)を開始しました。

“りぷりんと”プロジェクトは研究事業としては3年間で終了しましたが，3地域とも活動への熱意と主体性から任意ボランティア団体「りぷりんと」としての活動を開始し，現在も継続しています。

さらに，活動の意義と効果についての知見が広まるにつれて，高齢期における認知機能の低下抑制プログラムとしても期待され，多くの自治体からボランティア養成講座の開催と自主グループ活動支援の依頼が研究所に入るようになり，東京都杉並区，豊島区，横浜市青葉区の3地区で，“りぷりんと”として活動が始められています。

“りぷりんと”のシニアボランティアの人数は，開始当初は3地区67名でしたが，現在は6地区合わせて280名あまり，活動施設数は地元の小学校や幼稚園・保育園など合計100施設に達しています(2014年8月集計)。

◇活動内容

読み聞かせの実施方法は，施設ごとにさまざまです。例えば，中央区のある小学校では，1学級あたり月2回（年間18回），朝の学級活動の時間にシニアボランティアが教室を訪問して絵本の読み聞かせ（15分程度）を行っています。

写真1　読み聞かせの風景

読み聞かせの実演は，シニアボランティアが黒板を背に教壇に立ち，その前に児童が絵本が見えるように半円形に取り囲んで椅子に座るか，床に直接座って聞くという状態で行われるのが一般的です。

低学年の児童に対しては手遊びが導入として行われることもありますが，基本的には絵本の読み聞かせが主たる活動です。高齢者は子どもたちに自らの伝えたい「思い」を絵本に込めて読み，児童は表情，態度，ときにはつぶやきでそれに応えます。「物語の世界の共感」が，この活動の中心的な内容です。“りぷりんと”における高齢者ボランティア活動をまとめると次の図1のようになります。

図1　“りぷりんと”における高齢者ボランティアの1週間

6-1-6 りぷりんと

◇事業の強み

①絵本の読み聞かせは，明確な目的を持って何らかのメッセージを子どもたちに伝えることができるという点で大きなメリットを持っています。絵本は比較的短い作品が多く，朝の学級活動のように短い時間でメッセージや思いを簡潔に伝えるのに適しています。

②保育・教育現場で地域高齢者と交流することは，普段高齢者と接する機会の少ない子どもにとって，高齢者への親近感が生まれ，その理解の機会となります。これは，長期的な展望に立てば，地域に貢献する魅力的な老いのあり方のモデルを得る機会となります。

③両親ともに仕事を持つ保護者が多く，読み聞かせを始めとする学校行事への協力者として保護者を集められない学校が存在します。今後，益々こうした傾向は強まると推測されます。シニアボランティアによる絵本の読み聞かせ活動は，学校を支援する活動としてだけではなく，保護者，地域を支援する活動として発展する可能性を持っています。

◆ソーシャルキャピタルの視点

◇ソーシャルキャピタルを活かしたポイント

①“りぷりんと”のシニアボランティアの中には，10年以上のキャリアを持つ継続者がいます。長期継続者は，読み聞かせの技術や知識に1日の長があるのは言うまでもありませんが，それよりも，同一学区内の幼稚園・保育園から小学校へ，さらに小学校から中学校へと学校施設を接点にしながら，子どもと最長12年間の長期継続的な交流を持つボランティアも少なくありません。こうしたボランティアは，地域における“見守り手”として，安心して暮らせるまちづくりに欠かせない存在となっています。

②核家族化の進行により，シニアと若年世代の交流が減っています。その結果，両者の間に溝が生まれるのみならず，対立までもが危惧されています。そうした中で，読み聞かせを通しての幼少期からのシニアとの交流は，両者の関係を良好に保つ上で重要な役割を果たすことが期待されます。

◇健康福祉の成果

“りぷりんと”プロジェクトでは，2004年から，絵本の読み聞かせボランティアを通して，子どもとふれあう高齢者の心身への影響を研究しています。読み聞かせに参加するグループと，子どもと接する活動に参加していないグループに分け，定期的に調査し続けたところ，読み聞かせグループは「やりがいや生きる意味を感じる能力」が増加し，ストレスに対処する力が向上するとともに，「社会的ネットワーク」の広がりが見られました。

また，児童を対象にした調査では，プログラムに参加することを通して，児童のストレスの解消，高齢者イメージの向上および地域活動参加意識を高める効果が認められました。

こうしたことから，本プロジェクトは，高齢者と児童の相互の心身の健康にプラスの効果をもたらすだけでなく，地域のつながりを強める効果があることが考えられます。

◇課題と解決方法

立ち上げ当初は，いずれの地域も活動場所をいかに広げ，継続させるか，いかに会員数を維持しながら自主運営を行うかなど会の運営方法や方向性などに関することが課題でした。こうした共通の課題の解決策などをお互いに出し合い，共有するために「りぷりんと・ネットワーク」を結成し，地域を越えた連携活動を行うようになりました。たとえば，定期的に代表者が集まり，代表者会議を開くようになりました。また，年4回のニュースレターの発行とともに，ホームページ（http://www2.tmig.or.jp/healthpromotion/reprints/），フェイスブック（https://www.facebook.COm/reprintsnetworksince2004）を開設し，会員同士の情報交換をおこなっています。また，読み聞かせ活動の実践や経験をまとめたガイドブックの出版も行い，会員以外へのシニアによる読み聞かせ活動の普及啓発にも力を入れています。

◇事例から学べるポイント

活動を継続することが困難なメンバーの支援については，会員同士で支援のあり方を話しあう場を設けたり，コミュニケーションの技術を学ぶことを目的としたワークショップを開催するなどが試みられています。また，「りぷりんと・ネットワーク」全体に関わる問題については，およそ1年間の準備期間を経て2014年8月，NPO法人化することで，組織としての強化が進められています。現在，読み聞かせボランティアの養成と支援を主な収益事業として自治体から委託を受けることで自己財源を確保し，加盟する各地の“りぷりんと”の活動を支援するとともに，シニア自身の手でこうした活動の普及啓発が進められる体勢が整えられつつあります。こうした活動のあり方は，地域に根ざして持続可能な世代間交流を実現する上で，モデルになりうる先進事例といえます。

写真2　読み聞かせのイベントの風景

6-1-7 おおた高齢者見守りネットワーク（みま～も）

◆概要

◇活動の目的

高齢者が抱える課題が多問題化・複雑化するわが国において，介護保険などの制度や医療・福祉・介護の専門職のみで支えることは限界があると考え，「おおた高齢者見守りネットワーク」（以降，みま～も）は，①日常から近くにいる地域住民同士が見守り支えあい，②その見守りや支え合いだけでは生活維持が困難になった時に円滑に専門職による専門的支援が開始していける仕組みづくりを目指しています。そのために，みま～もは下記で紹介する様々な活動を通して，地域住民や地域の関係機関・団体（例　商店街等）により構成される「見守り支え合いのネットワーク」と，医療・福祉・介護の専門職により構成される「支援のネットワーク」の構築に取り組んでいます。

◇運営方法

みま～もは平成20年4月に東京都大田区の入新井地区を管轄する地域包括支援センター（以降，地域包括）と12 名の介護保険サービス従事者を主体に発足した地元の異業種事業所によるアウトリーチ型見守りネットワークです。現在の構成メンバーは，1）同地域包括を含む大田区内3つの地域包括，2）80以上の医療・福祉・介護の専門機関や事業所，健康関連の企業（製薬会社，食品会社，不動産，薬局，健康機器関連）および地域の大型百貨店や商店街からなる「協賛事業所」，3）95名の「みま～もサポーター」と言われる高齢者ボランティア（以降，サポーター）です。

入新井地区を管轄する地域包括は，大森地区のみま～も活動の事務局を務め，六郷地区を管轄する地域包括が蒲田地区のみま～も活動の事務局を務めています。みま～もでは，地域包括，協賛事業所，およびサポーターが協力して様々な活動に取り組んでいます。そのため，みま～もでは常に，多世代（20代から80代）および多業種のメンバー間の交流があります。

◇活動内容

みま～もは多世代・多業種での様々な協働事業を通して，地域包括－協賛事業所間，地域包括－高齢者間，高齢者間，協賛事業所の職員間，協賛事業所－高齢者間と高齢者間の連携を醸成しています。主な活動は次の3つです。

①地域づくりセミナー

毎月第3土曜日に一般住民を対象としたセミナーを開催しています。セミナーの講師は主に協賛事業所が担当しており，自社・組織の専門性を活かした講座を実施しています。講座は高齢者の日常生活に密着した企業，事業所，機関（例　防災を担当する消防署等）が担当しているため，高齢者の関心が高い内容が多くなっています。

②「みま～もステーション」によるサロン活動

大森柳本通り商店街振興組合と協働し，商店街の空き店舗を改修したお休み処を拠点とした，誰でも気軽に立ち寄れ，高齢者が役割をもって活動できるサロン事業を展開しています。また，サロンに隣接する地域で「立ち寄りがたい公園」として知られていた公園を区からの委託により管理し，菜園や介護予防器具が完備された集いの場へと改善しました。サロンと公園にて，サポーターと協賛事業所が，共に年間200以上のミニ講座の開催や商店街と合同のお祭りなどを実施しています。

写真1

写真1は，協賛事業所のリハビリステーション事業所が講師を務める介護予防体操教室の様子です。公園の遊具を使いつつ，皆で楽しみながら各自の健康状態に合わせた体操をおこなっています。

ミニ講座では，協賛事業所とサポーターが，それぞれの専門性や得意分野を活かして講師を担当しています。例えば，手芸が得意なサポーターが手芸教室の講師を務めています。また，調剤薬局チェーンの企業は，管理栄養士を薬局に配置し，客に栄養や食事に関するアドバイスをするといった特色を打ち出していますが，それをミニ講座で活かし，管理栄養士が地域の高齢者に夏みかんを使った健康料理教室を開催しました。なお，ミニ講座で使われた夏みかんはみま～もが管理する公園で収穫されたものを活用しています。

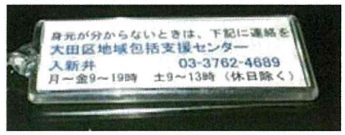
写真2

写真2は協賛事業所である有料老人ホームの管理栄養士が講師を務める食事会「みま～もレストラン」にて，皆で作った料理を，協賛事業所の職員と共に楽しみながら会食している様子です。

6-1-7 おおた高齢者見守りネットワーク（みま～も）

③「高齢者見守りキーホルダー」

事前に地域包括に本人情報，緊急連絡先，かかりつけ医療機関，病歴等を登録し，個人番号の書かれたキーホルダーで，キーホルダーを持った人が外出先で救急搬送された際や，認知症の徘徊などで，警察や消防から地域包括に連絡が入った際に，情報を共有することができるシステムです。平成21年8月にみま～もが地域住民と医療機関のソーシャルワーカーのニーズを受け，独自事業として「SOSみまもりキーホルダーシステム登録」を開始しました。高齢者にとっては，外出時の安心を確保できるツールであり，医療機関にとっては緊急搬送時に身元を迅速に確認できる有効な手段であることから，その有効性が広く認められ，平成24年4月より大田区の事業として全区で実施されています。



表面は地域包括の連絡先が記載されています

裏面は，地域包括が個人を特定できる個人番号が記載されています

◇事業の強み

みま～もの強みは，発足以来高齢者福祉関連分野を超えた多様な機関や団体との連携を目指し，異分野のアイディアや視点を柔軟に取り込んできました。その結果，地域の商店街や自治会・町会のみならず，近隣の保育園や小学校，障害者支援機関，民間企業といった多分野・多世代で構成される大規模ネットワークへと発展しました。現在は，さらに大規模かつ魅力的な事業を地域に仕掛ける地域づくりのプラットフォームとしての役割を果たしつつあります。

◆ソーシャルキャピタルの視点

◇ソーシャルキャピタルを活かしたポイント

みま～もでは，高齢者の孤立予防と健康維持・増進を目的にサロンと公園にてミニ講座や体操教室，お祭り等様々な活動を協賛事業所職員や高齢者がおこなっています。年間200あまりのミニ講座の他に，高齢者ボランティアが地域の保育園児を対象に絵本読み聞かせ会も開催しています。これらの活動が，地域に様々な波及効果をもたらしています。例えば，みま～もの管理により活性化した公園は，園庭を持たない認証保育所の散歩コースとなりました。また，サポーターと保育園児が協働で菜園を管理し，作物を収穫するといった新たな交流事業も生まれています。さらに，高齢者と若者世代（協賛事業所），保育園児といった多様な世代が常に集うサロンが通行者に可視化されることにより，商店街が東京都の優良商店街第2位を受賞（平成25年度）するほどに活性化されました。

公園の菜園で，地域の保育園児がサポーターや協賛事業所職員と共に，菜園を管理している様子です。

◇健康福祉の成果

地域の医療・介護・福祉の専門職が高齢者の社会参加・社会貢献活動を支援することにより，通常ではボランティア等の能動的な活動からは離脱しがちな二次予防や要支援に該当する比較的虚弱な高齢者も健康状態に応じた主体的な社会参加・社会貢献活動が可能になっています。さらに，地域の異業種・同業他社の専門職が協働でネットワーク活動に取り組むことにより，多職種連携も進んでいます。

◇課題と解決方法

立ち上げ当初は，限られた地域包括職員でいかに活動を地域の高齢者にアピールするか，地域の関係機関の協力を得るか，そしてセミナーやサロンの会場や資金を確保するかといった様々な課題に直面していました。その解決策として，地域包括が協力を得やすい介護事業所と協働で活動を始めると同時に，積極的に多分野との連携を模索しました。その結果，現在のような大規模ネットワークへと成長しました。

◇事例から学べるポイント

高齢者の孤立予防は，地域全体で高齢者を見守り支える仕組みをつくる必要性があるといった広い視野のもとに，多世代を取り込む活動に取り組んできたことにより，地域への波及効果が高い活動となっている。